「仏教版画の群像
―如来・菩薩・羅漢―」図録

場所　神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

期間　二〇一八年一一月一二日（月）～一二月二七日（木）

時間　午前一〇時～午後五時

土・日・祝日休室

はじめに

古典芸能研究センター所蔵の志水文庫には、様々なジャンルの写本、板本、洋装本のほかに、300 点を超える神道版画・仏教版画があります。センターに寄贈される以前の平成 20年、奈良県立美術館では志水文庫の版画を使って、「庶民の祈り　志水文庫　江戸時代の仏教・神道版画」という展覧会が開催されています。センターではこれまでに、志水文庫の版画の中から涅槃図や来迎図を取り上げた展示を数回行ってきましたが、今回は、仏教版画に描かれた“群像”に着目した展示を行います。

前半は、五百羅漢図、来迎図、四国八十八所の本尊を一面に描いた図、釈迦の入滅に集まった神･仏･人･動物を描いた涅槃図、京都の三十三間堂の千体千手観音像の図などを展示します。後半は、阿弥陀如来の世界を描いた当麻曼荼羅をはじめ､様々な曼荼羅図を展示します。特に墨摺筆彩大判の当麻曼荼羅（近世初期）は、寛永９年に袋中によって作られ、現在も檀王法林寺に所蔵されている版木を摺って彩色したもので、志水文庫の仏教版画の中でも逸品とよんでよいものです。画とはいえ、群像として描かれる仏や人はそれぞれ姿や表情が異なって生き生きと描かれています。是非、細部までじっくりとご覧になり、その姿をお楽しみ下さい。

「仏教版画の群像　―如来・菩薩・羅漢―」目録
（2018 年 11 月 12 日～ 12 月 27 日
神戸女子大学古典芸能研究センター展示室）

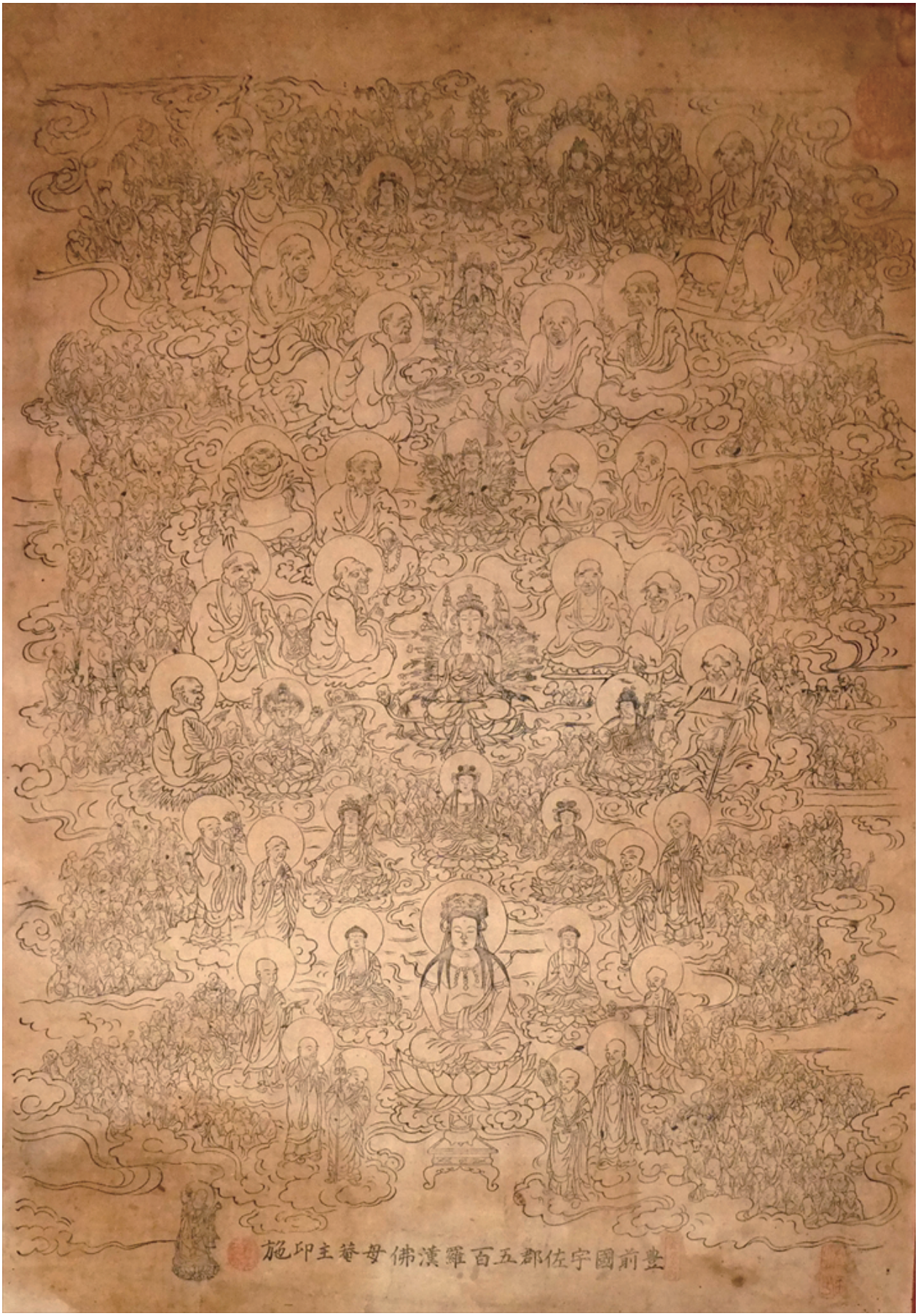
2018 年 11 月 12 日公開
編集　神戸女子大学古典芸能研究センター
（展示企画・図録作成担当　非常勤研究員　川端咲子）
〒650-0004
神戸市中央区中山手通二丁目 23-1

1　釈迦三尊五百羅漢像

一幅　紙本墨摺筆彩
江戸中期

上部中央に釈迦如来、左右に象に乗った普賢菩薩と獅子に乗った文殊菩薩を描き、その周囲や下に五百羅漢を描く。釈迦・普賢・文殊は金泥で、羅漢達は様々な色で彩色が施されている。

実際に五百人の羅漢がいるかはともかく、一人一人異なる表情・姿態で丁寧に描かれていることがわかる。



２　諸尊及び五百羅漢像

一幅　紙本墨摺　江戸中期

様々な如来・菩薩と羅漢たちが描かれた版画。下方に大きく描かれているのは釈迦如来か。その他十一面千手観音や千手観音などが確認できる。周辺に描かれた羅漢たちは１同様にそれぞれ異なる表情・姿態をしている。一番下に「豊前国宇佐郡五百羅漢仏母菴主印施」とあり、「壱万之内」という朱印から一万枚の摺写が企画されたことがわかる。

3　永平寺出現十六羅漢像

一幅　紙本墨摺　江戸後期

上部に「道元禅師親筆之寫」とあり、「寶治三年酉正月一日己午時供養十六阿羅漢於吉祥山永平寺方丈于時現瑞華記佛前…」と続く文章が書かれている。宝治三年 (1249) に永平寺で羅漢会が行われていた時に十六羅漢が示現したことは『十六羅漢現瑞記』に記されており、それに因んだ版画である。各羅漢の横にはその名前が記されている。

（部分）

4　六字名号

一幅　紙本墨摺　幕末から明治

「南無阿弥陀仏」の六字を大きく書き、字間に沢山の仏像を描き、名号の功徳を両脇等に書す。中には上品上生から下品下生までの様も描かれている。下部には「文久三亥年四十三才より七十六才四月十一日迄　彫工　浪花高麗橋通淀屋橋東江入古月堂梓」とある。

文久三年＝1863 年。

（部分）

5　百重千重囲繞之図

一幅　紙本墨摺彩色　明治 37 年

『浄土和讃』「現世利益和讃」15 首の内「南無阿弥陀仏をとなふれば　十方無量の諸仏は　百重千重囲繞してよろこびまもりたまふなり」を絵画化したもの。下方には和讃が並び、その下の文章の末尾には「明治卅七年一月　報恩ノ助縁ノ為写シテ座右ニ掲ク」とある。

6　阿弥陀如来像摺仏

一枚　紙本墨摺
平安時代

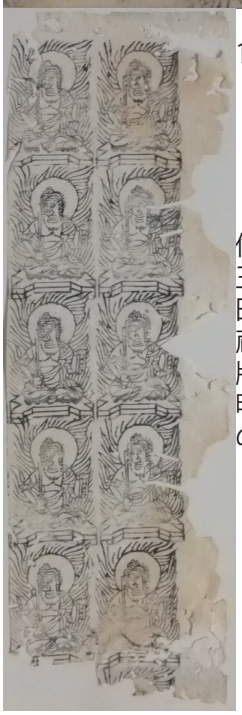
浄瑠璃寺（京都府木津川市加茂町西小礼場）の九体阿弥陀如来像の胎内に納入されていたと伝えられる摺仏の残欠。最も古い時代の摺仏といわれる。この図は「百体一版」といい、一枚の版木に百体の阿弥陀仏が彫られていた。浄瑠璃寺の摺仏にはもう一種類「十二体一版」がある。

7　大日如来像印仏

一枚　紙本墨印　平安時代

一枚の版木に複数の仏の姿を彫ったのが摺仏。一体の仏の姿を彫った版木を一枚の紙に次々と押して作成したのが印仏。６と10は摺仏で７・８・９は印仏である。

本図は成立年等不明であるが、同版木を使ったと思われる印仏で治承３年 (1179) の墨書があるもの（町田市国際版画美術館蔵）がある。



10　不動明王像摺仏

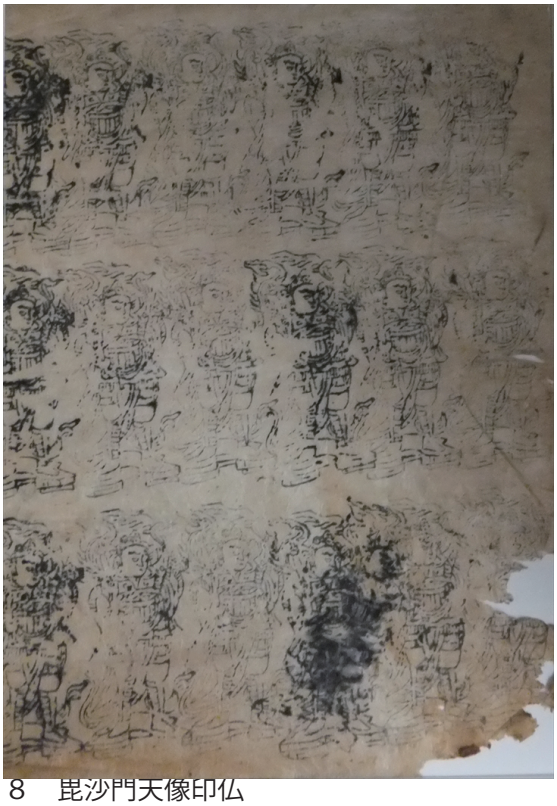
一枚　紙本墨摺
南北朝から室町時代

東寺旧蔵の木造不動明王の像内に納入されていた不動明王摺仏。奈良国立博物館や町田市立国際版画美術館にも所蔵されている。版木は十体一版で、十列十段で百体の不動明王を摺ったもの。本図はその断簡。

9　地蔵菩薩像印仏

一枚　紙本墨印　鎌倉時代

三体一仏の印仏。正安２年の年紀がある奈良国立博物館蔵の印仏と同版か。



8　毘沙門天像印仏

一枚　紙本墨印　鎌倉時代
（比叡山根本中堂伝来）

興福寺像の千手観音立像や中川寺旧蔵の毘沙門天像の像内に収められていた毘沙門天とは図様が異なる。

11　四国八十八所本尊像

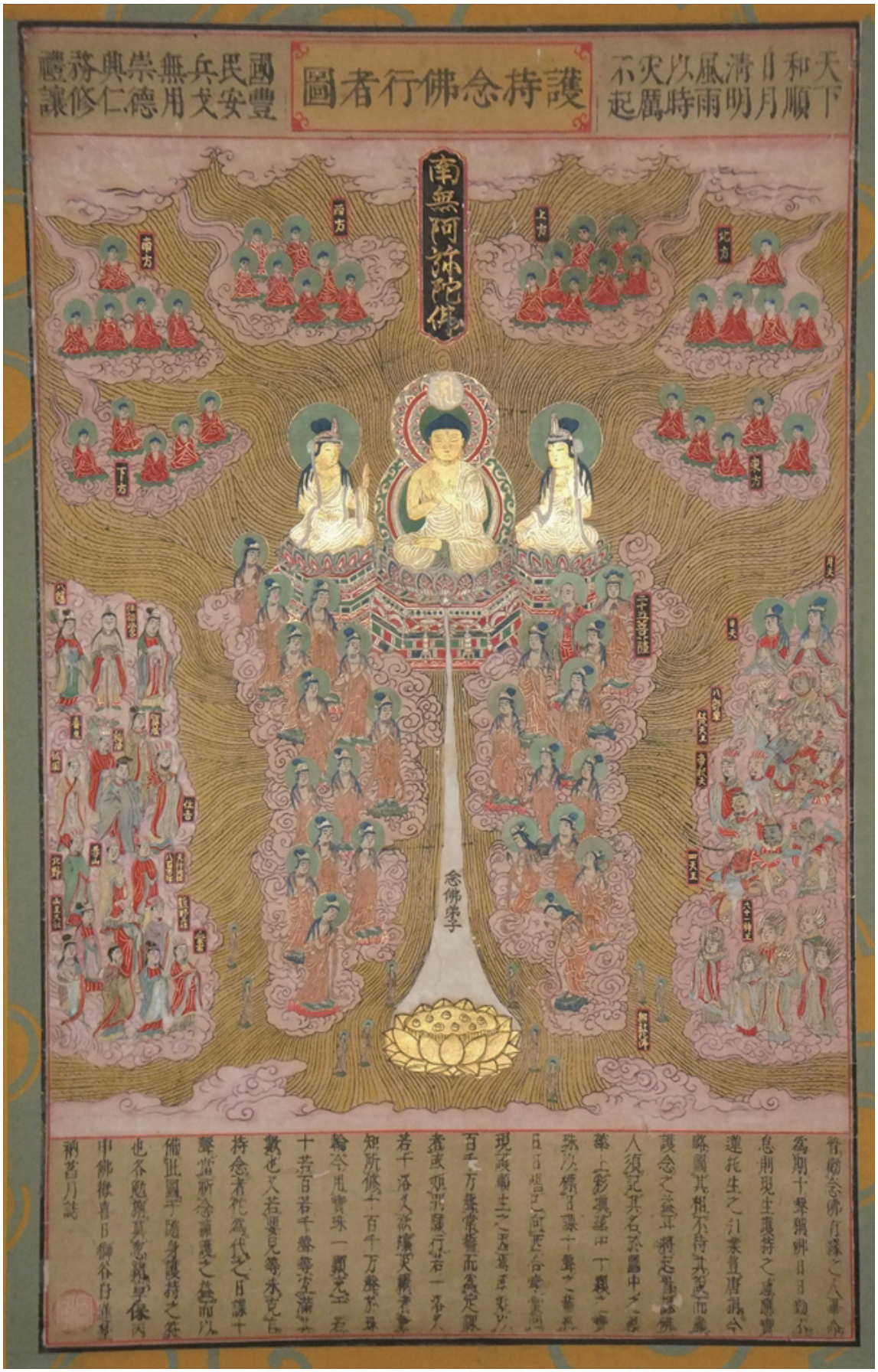
一幅　紙本墨摺　江戸中期

下方中央に弘法大師空海の座像を描き、その上に、下段の右端「一　しやか　れうせん寺」から上段の左端「八十八　やくし　大くほ寺」まで四国八十八所の寺院の本尊を並べる。

12　蓮華王院
　千手観音菩薩蔵

　一幅　紙本墨摺
　文政 12 年
　紀広成画

蓮華王院三十三間堂の千手観音座像・千体千手観音立像・風神雷神像・二十八部衆像を描いた図。下方の文字から、文政 12 年 (1829) 紀広成によって描かれたことがわかる。紀広成（安永 6 年（1777）～天保 10 年（1839））は四条派の絵師で呉春の弟子。『平安人物志』（文政 5 年刊）に「自覚　字子憲旧名紀廣成　嵯峨天龍寺傍」とある。



13　護持念仏行者図

一幅　紙本墨摺筆彩　享保元年（識語）

中央に阿弥陀三尊と二十五菩薩と無数化仏、左方には諸神、右方には諸天、上片には東方・西方・南方・北方・上方・下方の諸菩薩が描かれる。阿弥陀の前から伸びる道の先には蓮台があり「念佛弟子」の文字が見える。下方の「普勧念佛存縁之人」から始まる文章には、念仏行者が日々為すべきことが記されている。

14　十三仏像

一幅　紙本墨摺　江戸中期

「高野山定光院」の文字が書かれている。十三仏は、人の死後にその冥福を祈るため、初七日から三十三回忌までの 13 回の法事で、それぞれに本尊とする不動明王・釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩・地蔵菩薩・弥勒菩薩・薬師如来・観音菩薩・勢至菩薩・阿弥陀如来・阿閦如来・大日如来・虚空蔵菩薩をさす。一軸に十三仏を描いた作例は多く残っている。

15　釈迦涅槃図

一幅　紙本墨摺筆彩
江戸時代前期

四本の沙羅双樹の下で頭を北にして西を向いて横たわる釈迦の周りに、菩薩･天部･弟子･大臣などと鳥獣が集まり、嘆き悲しむ様が描かれている。各寺院で 2 月 15 日の涅槃会に掛けられる涅槃図は、その作例も多く、版画も多数残る。この図は正保三年 (1647) 極月吉日室町通鯉山之町小島弥左衛門開之と同版である。

16　釈迦涅槃図

一幅　紙本墨摺筆彩　江戸初期カ

涅槃図の構図にはいくつかのパターンがある。大半の涅槃図では集まった鳥獣に猫の姿はないが、一部の涅槃図には描かれている（東福寺の涅槃図が有名）。上方に阿那律尊者に導かれて忉利天から釈迦の元に駆けつける摩耶夫人が描かれているものと描かれていないものがある。

17　阿弥陀衆生来迎図

一幅　紙本墨摺　江戸中期

人が死ぬと、阿弥陀如来が、西方極楽浄土へと迎えるために現れる。その様を描いたのが来迎図である。来迎図には阿弥陀のみ、阿弥陀三尊のみのものもあるが、本図のように多くの菩薩も描かれているものもある。本図は上方と下方に分かれており、下方が死者を迎えに来た様、上方は浄土へと連れて行く様である。本図には「来迎引接恵心御筆御影」とあり、恵心作とされる来迎図に基づくと考えられる。

18　迎接曼荼羅

一枚　紙本墨摺　江戸中期

清涼寺蔵の迎接曼荼羅 (重文) の模本。博多の善導寺で版行されたことが下端の銘文からわかる。清涼寺の迎接曼荼羅は、熊谷直実が所持していた法然上人自筆の来迎図と伝えられている。

19　金光明曼荼羅

一幅　紙本墨摺筆彩
江戸中期から後期

上部に「金光明曼荼羅」とあり、『金光明経』の所説に基づく図様。中央に釈迦如来（印は来迎印カ）、その上部には四方四仏を描き、護持の四天王や弁財天・吉祥天などを配する。下部の「勢州山田善光寺蔵版」から、伊勢にある善光寺の版木による版画とわかる。伊勢市吹上に天台宗真盛派の善光寺が現存する。本図との関連は不明。

20　絵曼荼羅御影

一幅紙本墨摺　江戸中期

中央の蓮台の上に「南無妙法蓮華経」の文字、上には天蓋を描き、諸尊、僧侶を周囲に配置する。下方中央に「大覺（花押）」の文字が見えその左右には僧と尼が合掌する。下部には「皇都北野法華寺繪曼陀羅御影」とある。北野法華寺には開基大覚大僧正筆の「絵曼荼羅」（延文二年 (1357)）がある。その写しか。

21　法華経変相図　（法華経曼荼羅）

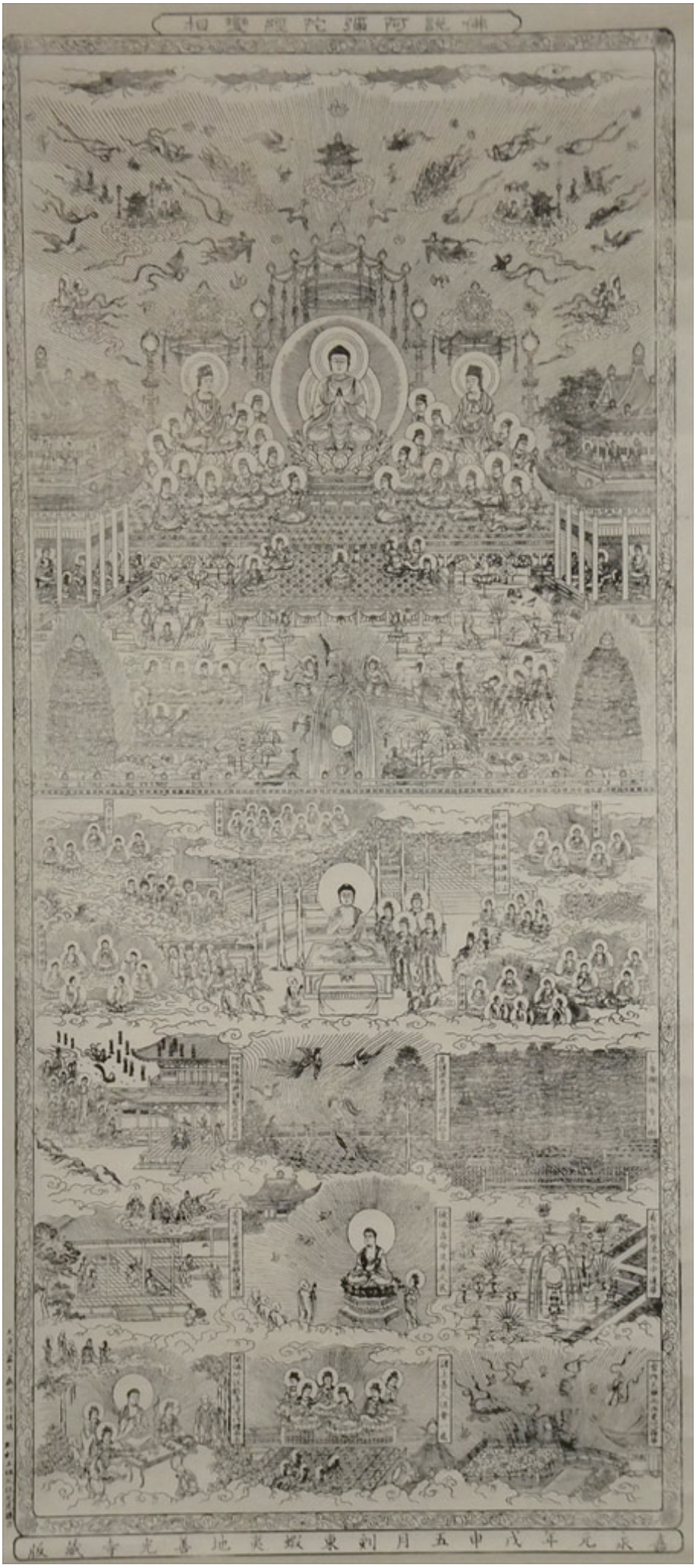
三枚　紙本墨摺　江戸中期

『法華経』の序品（第一）から普賢菩薩勧発品（第二十八）までの各章を描いた図。三幅の下部にそれぞれ「遠江國敷知郡」「岡崎村龍澤山」「法華禅寺蔵版」とあり、現在の静岡県湖西市岡崎にある龍澤山法華寺（曹洞宗）所蔵の版木によるものである。

22　兜率天曼陀羅　（都卒内院浄土之図）
　　一幅　紙本墨摺筆彩　天保五年識語

弥勒菩薩の浄土である兜率天を描いた曼陀羅。『観弥勒菩薩上生兜率天経』の記述による。兜率天曼陀羅の中で有名なのは、延命寺蔵の兜率天曼陀羅（国宝）である。延命寺の曼陀羅が斜め上から俯瞰するかのように描くのに対し、本図は正面から描く。

旧裏面の白壽山寶相院現住豊艸庵（未詳）の識語から、弘法大師一千年忌に彩色を完成させたことが分かる。



23　仏説阿弥陀経変相図

一幅　紙本墨摺　嘉永元年（板木）

宝山寺所蔵の板木の三井淳生氏による新摺。板木は嘉永元年の制作。京絵師の森田易信の画。

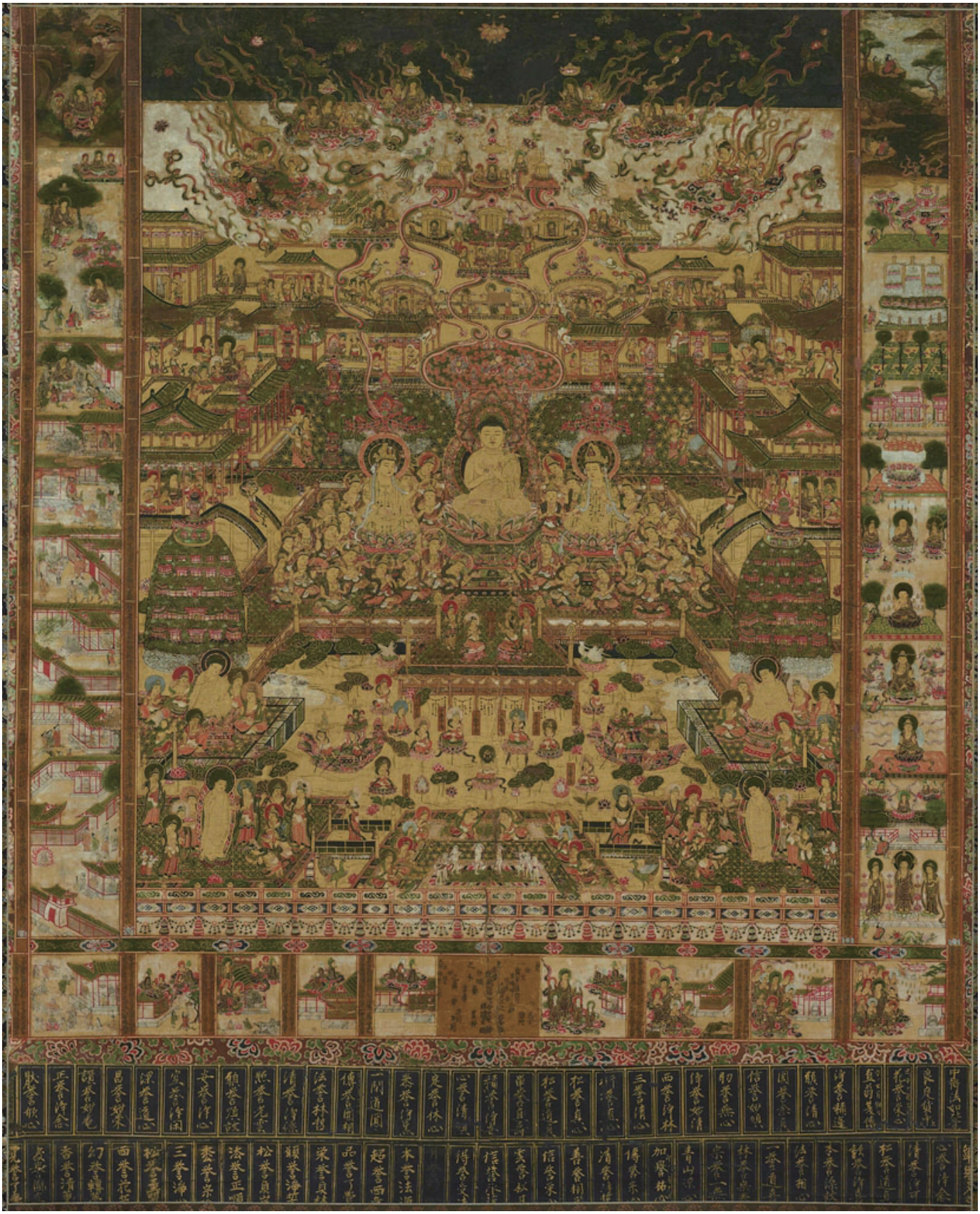
三井淳生（昭和４生）は洋画家三井文二の長男。河北倫明の元で伝統的創作版画の制作と日本版画の研究に励む。仏教版画の調査研究を端緒として志水文庫旧蔵者である信多純一先生と深い交誼を結んでいた。著書に『日本の佛教版畫』(岩崎美術社) がある。

24　三十番神　當麻曼荼羅

紙本墨摺　江戸後期

簡易の軸の上部に三十番神、下部に当麻曼荼羅を貼る。上下の図に関連はないと思われる。

三十番神は、熱田大明神から吉備大明神までの三十体の神で、法華経を守護する。三十番神は最澄が延暦寺で祀ったのが始まりとされるが、中世以後日蓮宗で重視されるようになる。中央の蓮台に南無妙法蓮華経の文字を記し上に天蓋が描かれている。



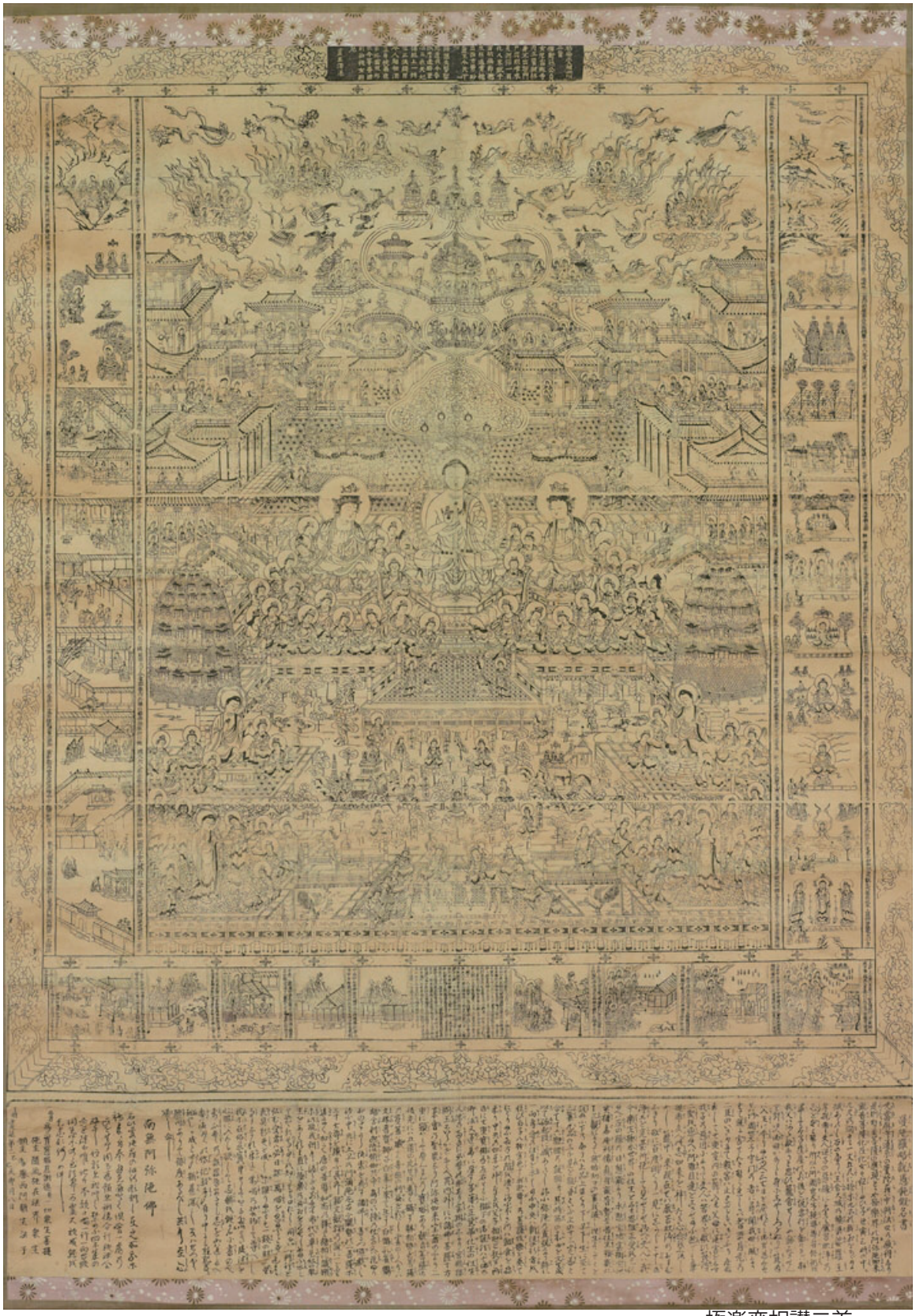
25　當麻曼荼羅
　　一幅　紙本墨摺筆彩　江戸初期

　寛永九年完成した壇王法林寺 (京都) 蔵の板木を摺って筆彩を加えた當麻曼荼羅。壇王法林寺は、袋中上人中興の浄土宗の寺である。袋中上人には、『當麻曼陀羅白記』（慶長 19 成、慶安元刊）など當麻曼荼羅に関する著述が複数見られる。下部には「中将法如比丘尼」「良定袋中上人」の名と本図の制作に寄与した人々の名が記されている。

26　当麻曼荼羅

一幅　紙本墨摺筆彩　安永三年

　下方に「曼荼羅出現天平宝字七年六月廿三日至宝暦十二年壬午満一千年※如法尼示寂宝亀六年三月十四日至安永三年甲午満一千年東都深川※禅教寺鏡譽戀阿印施百萬 (以下切断)」とあり、中将姫こと如法尼の一千年忌に深川の寺で作られたらしいことがわかる。



27　当麻曼荼羅（独湛曼荼羅）
　　一幅　紙本墨摺　寛延二年識語

黄檗第四世獨湛による曼荼羅を「獨湛曼荼羅」と呼ぶ。上方に「極楽変相讃二首」が記されるのが一つの特徴である。獨湛は隠元禅師と共に来日した黄檗僧であるが、念仏獨湛とも呼ばれ、浄土宗の僧との関係も深い。下方には「曼荼羅略説愚鈍仮名書」が書かれ、「施主随流願主誓誉　于時寛延第二巳己天卯月八日」とある。獨湛曼荼羅は光覚昌堂によって藤屋忠兵衛から元禄十年に版行されるが、本図は寛延二年に誓誉こと升屋吉兵衛から版行された。

極楽変相讃二首

僕射藤公貞女尼　当麻寺内立誓詞
終身不出斯門戸　肉眼唯求見阿弥
一日化人来試手　百駄藕節撚成糸
通宵織出西方景　妙麗至今天下知

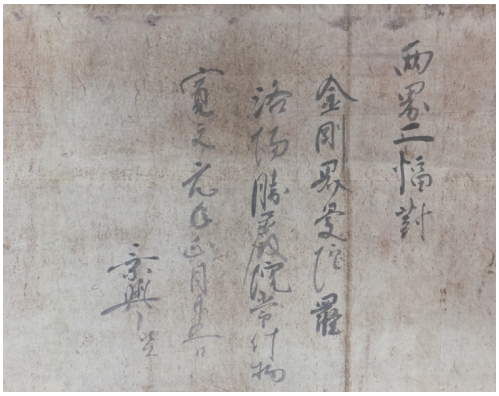
諦想先賢聖跡遺　我今慕倣慶逢時
筆端五色天妃錦　紙上一舗依正儀
触目令人起穢濁　置身悦爾在華池
当麻移在今等善　法則卻従女則施

震旦獨湛

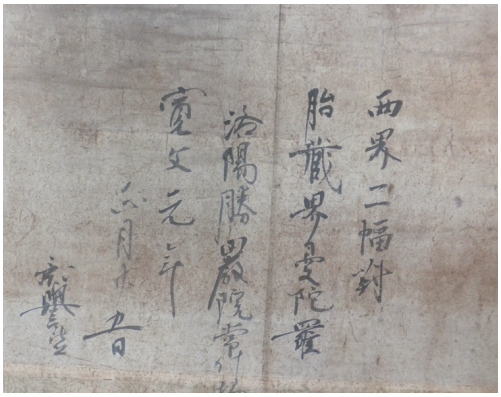
28　当麻曼荼羅　一幅　紙本墨摺

29　両界曼荼羅（金剛界）
　　二幅　紙本墨摺　寛文元年（裏書）
　大日如来を中心に諸尊から構成される大規模な曼荼羅。金剛界と胎蔵界を合わせて両界曼荼羅という。密教の修法の本尊である。本図は、それぞれ裏書に「両界二幅對　金剛界（胎蔵界）曼荼羅　洛陽勝厳院什物　寛文元年正月廿五日　乗譽」とある。

30　両界曼荼羅（胎蔵界）



（金剛界裏面）



（胎蔵界裏面）